

北九州市立足原小学校 庄 展彦

## 1. 「公害」から「環境」へ変わるまち

日本の近代産業は、1901年に国内初の本格的近代溶鉱炉を持つ官営八幡製鉄所が操業を開始した北九州で幕を開け、その後、北九州工業地帯は四大工業地帯の一つとして日本の高度経済成長を支えてきた。その一方、1960年代には、厳しい環境破壊にみまわれ、深刻な産業公害に悩まされてきた。いつしか北九州市は「鉄のまち」から「灰色のまち」と呼ばれ、日本一汚い空と海のまちとなった。洞海湾は、絵の具を溶かしたようによどみ、船のスクリューも腐食するほど汚染され、水銀、カドミウムなど、有害物質を含み、大腸菌すら棲めない「死の海」と呼ばれた。同様に、大気も「七色の煙」と誇っていたが、やがて、ぜんそくなど公害病を生み、日本一の降下煤塵のもと、スモッグ警報を出すほど汚染されてきた。

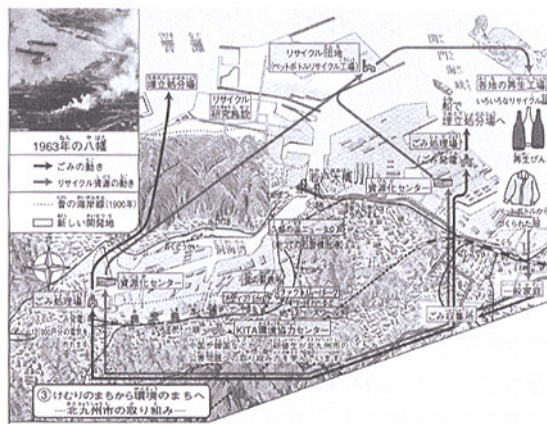
市民・行政・産業界が一体となって、この厳しい環境に立ち向かい、環境浄化を行い、公害を克服してきた。さらに環境汚染を克服する過程で蓄積した技術や経験を開発途上国に役立てる活動をはじめ、現在では友好都市の中国・大連市などの環境国際協力への積極的な取り組みをするまでにいたっている。そのため、公害克服と国際協力の2点が国際的に認められ、1990年には国連が地球環境保全に貢献した人や団体を表彰する『グローバル500』を受賞し、1992年に、ブラジルで開催された「環境と開発に関する国連会議」（UNENCED／地球サミット）において、日本では唯一、『国連地方自治体表彰』を受賞している。

## 2. 環境都市～北九州エコタウン～

産業公害を克服した現在、地域環境は都市・生活型公害が問題化し、それは、徐々に地球規模での環境破壊をもたらしている。その解決のためには「大量生産・大量消費・大量廃棄」という20世紀の生活様式・社会構造から、21世紀に生きる、共

生と循環を基調とした持続的発展を可能にする「最適生産・最適消費・最小廃棄」の資源循環型社会への転換が求められている。北九州市では全国に先駆けて、環境調和の共生・循環による『資源循環型社会』を創っていくために『大量生産・消費型社会』を支えてきた「動脈産業」から転換し、『資源循環型社会』を創っていく「静脈産業」を育成するため、ゼロ・エミッション構想を推進する北九州エコタウン事業に取り組んでいる。

ゼロ・エミッション構想とは、市民生活や産業活動からすべての廃棄物を他の産業分野の原料として活用し、あらゆる廃棄物をゼロにするものである。つまり、工業都市の宿命として背負った「負の遺産（公害）」で得た貴重な経験を生かし、次代に「正の資産（環境産業）」として生かそうとしている。



帝国書院「楽しく学ぶ 小学生の地図帳(最新版)」p.18

現在、北九州エコタウンでは、ペットボトルリサイクル工場、OA機器リサイクル工場、自動車リサイクル工場、家電製品リサイクル工場をはじめ、多くのリサイクル工場が稼働している。また、福岡大学の資源循環・環境制御システム研究所をはじめ、環境・資源などの再利用に関する研究も進められている。

子どもたちが、これらの北九州市の取り組みを具体的に学ぶことで、自らの消費生活の在り方を見つめ、一人ひとりの人間が環境保全のために、積極的に働きかけようとする意欲や態度が身についてくるものと考えられる。